

## 事務局 使用欄

# 日本薬局方生薬ニガキ Picrasmae Lignum に関する 考証研究

○木下 武司<sup>1)</sup>

(<sup>1)</sup>帝京大薬)

【目的】ニガキは第3改正局方でカシア木の基原の一つすなわち代用品と扱われた。第4改正版でカシア木は削除、ニガキのみが正式に収載され、今日に至る。第五改正版までは苦木と漢字で表記、第六改正版以降にニガキとなった。中国では苦木のほかに苦樹、苦檀、山苦棟、黄棟樹など多くの異名があるが、薬用とすることはない。ニガキはいわゆる純粹の和薬であるが、わが国固有とはいえず、中国の影響下で発生した例がある<sup>1)</sup>。ニガキの発生経緯について中国の影響の有無について考証した結果を報告する。

【方法・結果】わが国の本草書における苦木の初見は1709年の『大和本草』である。一方、中国では黄棟樹の名が1406年の『救荒本草』にあり、センダン科チャンチン(椿樹)、同トウセンダン(棟)に似て、花の色は紫赤色、葉が少し黄色を帯びるとしてその名をつけた。一般に中国本草における花の色の記載は正確さに欠けるので、黄棟樹の名の由来を葉ではなく、ニガキを黄色の集散花序に由来すると考えれば、そのほかの記述をあわせて黄棟樹はニガキとして問題はない。『救荒本草』は黄棟樹の葉を救荒食とし薬用に関する記載はまったくないが、中国における有用情報がわが国に伝わり、何らかの経緯で薬用に転じたとも推定できる。しかし、『大和本草』は他項目では『救荒本草』をよく引用するが、ニガキの条項で黄棟樹について一切言及していない。『大和本草』とほぼ同時期に成立した『和漢三才圖會』にも黄棟樹の条があるが、単なる『救荒本草』の引用に留まり、和名の記載はない。すなわち、当時のわが国では黄棟樹をニガキと見なしていなかったことになる。興味深いことに、『救荒本草』より100年ほど古い和籍医書『頓醫抄』にニガ木、苦木なる名がみえ、それを配合した処方はいくつか収載する。いずれの処方も外用薬で内服するものではなく、またマメ科クララ(苦参)、ツツジ科アセビ(枝葉)など苦味のつよいものを配合するので、殺菌・駆虫などを目的としたものと考えられる。ニガ木、苦木の名から苦味のある薬木一般を指す可能性もあるが、江戸期の民間療法書『此君堂薬方』にニガキの葉を外用薬とした例があるので、ニガキ科ニガキの基原と考えられる。以上から、ニガキは中国の影響をまったく受けずに発生した和薬であり、明治以降に西洋の影響で苦味健胃薬に登用されたと考えられる。

<sup>1)</sup>木下武司、日本薬学会第133年会(横浜、2013年)、「センブリ」。